

## 六 稲葉黙齋『姫寫口義』

解題・注釈・校合 大久保紀子

### ○『姫寫口義』解題

『姫寫口義』は、千葉県山武市成東の熱田秀夫氏所蔵の稲葉黙齋の真蹟書である。『姫寫口義』の成立の経過については『姫島講義』の解題ですでに述べたので、ここでは、この真蹟書が熱田氏に伝えられた由来を述べ、次いで『姫寫口義』と『姫島講義』の性格の相違を示す具体的な部分を示すこととする。真蹟書が熱田氏に伝えられた由来については、千葉県山武市成東在住の山口巖氏のご教示によってここに記すことができた。本解題の資料<sup>1</sup>も、山口氏のご教示によるものである。記して謝意を表す。

### (一) 鈴木氏から花沢氏、さらに熱田氏へ

『姫寫口義』は、『姫島講義』解題に記したとおり、黙齋が、宝暦二（一七五二）年、上総清名幸谷（現千葉県山武郡大網白里町清名幸谷）滞在中に記した『道学標的』の講義の概略である。黙齋は、『姫寫口義』を迂斎の八幅の墨蹟とともに小童に託して八人の門人に与えようと考えた。実際に八幅の墨蹟はそれぞれ門

人の手に渡され、『姫寫口義』は八人がどのような形で目を通したかは不明であるが、鈴木養察<sup>⑤</sup>によって所蔵されたものと思われる。養察は、『姫島講義』一の語注で述べたように江戸で迂斎に学び、帰郷して上総に道学の種を播き、育てた第一人者であった。上総の門人の筆頭にあげられている養察が『姫寫口義』を所蔵したと考えても無理はなからう。

山口氏は、平成十六年一月、『姫寫口義』真蹟書を所蔵している熱田秀夫氏の御母堂熱田静江氏に熱田家に真蹟書が伝わる由来について尋ね、次のような事実を確認した。熱田家の現当主秀夫氏の祖父、つまり静江氏の父君常三郎氏は山武市湯坂の花沢常藏氏の三男であった。常三郎氏が熱田家に養子入りする際、祖父花沢退藏氏の所蔵本を分け与えられ、『姫寫口義』真蹟書はその一冊であったということである。

花沢退藏氏が何故『姫寫口義』真蹟書を所蔵していたかは確認できなかったとのことである。山口氏は、佐藤直方門下では写本や貴重本を愛弟子に譲る習慣が昭和まで続いていた模様であることから、おそらく花沢退藏氏の師である鈴木養斎が、その祖父養察から受け継いだ真蹟書を退藏氏に与えたのではないかと推測する。以上のことを図示すると資料1のようになる。

花沢退藏（文政元「一八一八」年—明治二十八「一八九五」年）は養察の孫、鈴木養斎に学び、その没後は奥平棲遅庵に師事した。学に努め、温厚、篤実、同じ湯坂の佐久間泉台、佐藤秀敏らと村内の風紀をあらためるに力あったとして、安政三（一八五六）年、領主から褒美を下賜されている。<sup>⑥</sup>

## （二）『姫寫口義』と『姫島講義』

『姫島講義』解題で述べたように『姫寫口義』は特定の門人達に宛てた書簡であり、それが整齊を加えら

れて『姫島講義』という講義の形に変容していったと考えられる。両者の性格の違いを具体的に示す部分を資料としてあげる。構成の違いについては『姫島講義』解題を参照されたい。

資料2は『姫寫口義』と『姫島講義』の校合で用いた底本を比較し、細かな字句や文単位での相違は省略して、段落単位での相違を示したものである。AとBを見れば、『姫寫口義』と『姫島講義』の性格の違いは明らかである。Aでは、『姫島講義』の「聖人」の説明が、『姫寫口義』のそれと比べて、格段に行き届いた講義というにふさわしい説明になっていることがわかる。聖人について丁寧に解説されているだけでなく、人たる者はみな聖人を目指すべきであるという方向性が明確に打ち出されている。

また、Bの『姫寫口義』の部分には、たとえば「及<sup>レ</sup>企<sup>ニ</sup>行装<sup>ツ</sup>」、あるいは「以<sup>ニ</sup>易<sup>ニ</sup>石尤<sup>ニ</sup>風<sup>ニ</sup>」などのいかにも旅先の宿らしい表現がある。それに対して、『姫島講義』の部分は講義にふさわしく学問を力強く奨励する文章となっている。

# 〔注〕

- (1) 『姫島講義』解題参照。
- (2) 『姫寫口義』末尾の宛名の「姫寫大兄」
- (3) 伊庭氏蔵、田原秀信『諸君子小傳』

## 資料1

——は父子関係、……は師弟関係を表す。は真蹟書を所蔵していた者、は所蔵していたと推測される者を表す。

鈴木養察 □ 鈴木養齋 …… 花沢退蔵 花沢常蔵 熱田常三郎 熱田周意・静江夫妻 熱田秀夫

(一七七九年没) (一八三七年没) (一八九五年没)

資料 2

A 漢字片仮名混じりの和文の部分

『姫寫口義』

聖人ト云人、日本タヘテ一人モ見ヘ玉ス。神武以来近付ニ一人モナク、中国トデモ四五千年ノ久キ、ツイニカホ出モナケレハ、ドノヨフナモノト書付テハミセカタク、口ニ述テハ聞セガタシ。

『姫島講義』

所謂聖人ナル人、日本タヘテ一人モ見ヘ玉ハズ。神武以来一人モ近付ニナケレバ、吾人思ヒ忘レテヲルハ聖人ナリ。然ルニソノ聖人ナルモノ、別ニ天ヨリ内々ノ賦命アルニ非ズ。又外ニ格段ノ重寶ヲモ領セズ。耳目鼻口四肢百骸、吾人ト分寸ノ異ナルコトナケレバ、吾此一身モ聖人ト同ク完全備足シテ、聖人ニ對シ耻シカラヌ家筋ナリ。只一毫ノ私欲、吾コノ血氣形体ニ長ジハビコリテ、自カラ如<sup>レ</sup>此汚濁ノ身ニヨチブレタルナレバ、吾此人欲ノ汚レタルモノヲ、吾此聖人ト共ニ持合セタルモノヲ以テ逐ヒ退レバ端的聖トナルノ路徑ヒラケテ、萬里之遠參商之隔千苦百難トイヘトモ、道ハ品川カラ長崎マデズツトアイテオレバ、イツゾハ聖人ノ域ニイタラザルノ理ナシ。此又分外過當ノ望ニアラズ。吾コノ天ヨリ備足スル處ノ本体トナリタルノミ。聖人豈遠カラランヤ。

B 漢文の部分

『姫島口義』

不<sup>リキ</sup>レ圖<sup>ナラント</sup>姫嶋老兄家禍如<sup>レ</sup>。此<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>レ是不<sup>ニ</sup>レ得<sup>ク</sup>三<sup>スルコトヲ</sup>八子同集<sup>ニ</sup>會<sup>ス</sup>。姫島<sup>ニ</sup>而日<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>之友人<sup>ニ</sup>憂<sup>ル</sup>レ負<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>初心<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>而已<sup>ニ</sup>。  
十一月朔行<sup>ニ</sup>東金<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>日反<sup>リ</sup>清名村<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>友人<sup>ニ</sup>期<sup>下</sup>明<sup>テ</sup>三日啓<sup>テ</sup>行<sup>ヲ</sup>歸<sup>中</sup>江府<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>及<sup>レ</sup>企<sup>ニ</sup>行<sup>ヲ</sup>裝<sup>ニ</sup>徒然<sup>トシテ</sup>將<sup>下</sup>持<sup>チ</sup>二<sup>ニ</sup>墨跡<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>空<sup>ク</sup>歸<sup>上</sup>郷雖<sup>ニ</sup>然<sup>リト</sup>レ吾何<sup>ニ</sup>嫌<sup>タラン</sup>哉因<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>鵜沢氏<sup>ニ</sup>謀<sup>リ</sup>レ實<sup>ニ</sup>前約<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>輒<sup>ク</sup>作<sup>ニ</sup>講義<sup>ニ</sup>一小冊<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>充<sup>テ</sup>面會<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>以欲<sup>下</sup>歸<sup>シテ</sup>後煩<sup>ニ</sup>小童生<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>各<sup>ニ</sup>與<sup>中</sup>其家<sup>上</sup>便<sup>ニ</sup>安綴<sup>ニ</sup>數言<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>以易<sup>フ</sup>石尤風<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>云<sup>ル</sup>爾。宝曆壬申十一月二日「稻葉亦三郎操<sup>ル</sup>二<sup>ニ</sup>箋<sup>ニ</sup>於清名村旅館<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>」  
『姫島講義』

不<sup>レ</sup>圖<sup>レ</sup>姫島家禍如<sup>レ</sup>此以負<sup>ニ</sup>初心<sup>一</sup>。因作<sup>ニ</sup>講義<sup>一卷</sup>一。略示<sup>ニ</sup>要領<sup>一</sup>。與<sup>ニ</sup>之八子<sup>一</sup>。以勵<sup>ニ</sup>其志<sup>一</sup>云。八子勉  
乎哉。美質之易<sup>レ</sup>得。至道之難<sup>レ</sup>聞。此佐藤夫子之所<sup>下</sup>以蚤<sup>ニ</sup>編<sup>ニ</sup>鞭策錄<sup>一</sup>一<sup>ニ</sup>晚著<sup>中</sup>道學標的<sup>上</sup>一。而彼闡<sup>ニ</sup>明道學<sup>一</sup>。  
排<sup>ニ</sup>斥異教<sup>一</sup>。使<sup>ニ</sup>後學知<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>依歸<sup>一</sup>者非<sup>レ</sup>此。而將何<sup>ニ</sup>在哉。寶曆壬申冬十一月

○『姫島口義』注釈

凡例

- 一、本編は、千葉県山武市成東 熱田秀夫氏所蔵の稻葉黙斎の真蹟『姫島口義』の翻刻である。
- 一、原文は漢字片仮名混じりの和文と漢文によつて成る。最初に原文をあげ、次に漢文の部分の訓読文を記し、最後に語注を附した。
- 一、真蹟書を忠実に翻印するように努めたが、読解上の便宜をはかるために次のような変更を加えた。

1 漢字片仮名混じりの和文の部分について

- (1) 適宜段落に分け句読点を加えた。
- (2) へ、氏、ノ、フ、子は現行一般の表記に直した。
- (3) 原文の双行、小字の割注は「」で括り、単行の普通字とした。
- (4) 書名については『』引用句等については「」で括った。
- (5) 意味上、並立の関係にある語句と語句との間に・を補った。
- (6) 和文の中の漢文体の文については、訓読しにくいもののみ語注で書き下した。

2 漢文の部分について

- (1) 原文の双行、小字の割注は「」で括り、単行の普通字とした。
- (2) 豎点、圈点などは省略した。

3 漢文部分の訓読では、便宜上人名以外は新字を用い、よみにくい字には振り仮名を加えた。

一、語注では、『姫島講義』の語注と重複する項目を省略した。

▼原文

姫  
寫  
口  
義

呈<sub>ス</sub>  
上  
総<sub>ニ</sub>  
ノ  
諸<sub>ニ</sub>  
君<sub>ニ</sub>  
一

聖人ノ道先儒ノ議論已ニ尽キ、實ニ確ニ無<sup>ケレハ</sup>ニ復<sup>タ</sup>遺蘊<sup>タ</sup>、則今更新ニ述ルモ贅ナリ。タゞ「四書」、<sup>ナレハ</sup>『小學』、『近思』ノ三書ヲグルくくト讀メバ、ソノ中自深意出デ他ニ求ルニ及ズ。然レトモソノ三書トテモ、タゞグルく讀ム而已ニテウカくトシテハ、睡リナガラ須磨<sup>ヌ</sup>、明石ノ景ヲ見ル如クニテ、何<sup>ナレハ</sup>遍アロキテモ爭デカソノ景色ヲ知ランヤ。サレバ、三書ヲハツキリト目ヲ惺シテミルガ肝要ナリ。ソコデコソ昔年我 佐藤先生、『講學鞭策』ノ書ヲ著シ玉ヘリ。學者衆ノグツツカル、ニムチヲアテ、ネムラル、人ノ耳ヲヒカル、異見ナリ。然レバ、「四書」、<sup>ナレハ</sup>『近思』、『小學』ノ三書、イカホド難<sup>レ</sup>有結構ナル書ナレバトテ、鞭策ノ心ナケレバ、鱸ニ酢ノキカザル如クニテ、鯛<sup>タイ</sup>モ鱸<sup>コ</sup>モ無用ノ肴トナルナリ。「四書」モ『近思』モ無用ノ書トナルナリ。タゞく此心ヲヒキタテく、眼ヲサマシテ、先輩タチノ異見ヲ誠ニ切身<sup>キリミ</sup>ニ塩ヲ付ル如クニキクカ、千と万と實ニ學ブト云モノナリ。「我友如何思召ヤ」と自家身上ニ引付ケ痛ク警策スベシ。

サテソコニ一ツノ不審アリ。世ノ中ニサマく儒者タチアルニ、何レヲミテモ安樂ニ詩ヲ賦シ文ヲ作り、登<sup>ニシ</sup>山步<sup>ニ</sup>月、飲<sup>ニ</sup>酒啜<sup>ニ</sup>茶ア、ラクくト樂ミ世ヲ渡リクラセトモ、トコヨリ咎ムル人モナク、學者大儒先生ト呼ハル、ニ、何ヲクルシミテ山崎一家ノ學ハ勵ミ苦ミテホネヲヲラル、ゾ。カククルシマル、學ハ果シテ何ノ學ゾヤ。曰「吾學由來有準的以至聖人」之學ナリ。聖人ト云人、日本タヘテ一人モ見ヘ玉ス。神武以來近付ニ一人モナク、中国トテモ四五千年ノ久キ、ツイニカホ出モナケレハ、ドノヨフナモノト書付テハミセカタク、口ニ述テハ聞セガタシ。タゞ聖人ト云人ヲ目當ニシテスル學問ヲ、眞儒トモ云ヒ、古ヘノ學者トモ云ヒ、君子儒トモ云ヒ、道學トモ云ヒ、經學トモ云ヒ、爲<sup>レ</sup>己之學トモ云ヒ、他処カラハ宋儒トモ呼フ。皆是我黨學脈心法聖門<sup>ホフ</sup>ノ旨訣ナリ。タゞソコノ道學ト云目當ナケレハ、向<sup>サ</sup>キニ所謂先輩ノ異見モ、講學之鞭策モ、亦無用ノ異見、無用ノ鞭策トゾナルナリ。ソコデコソ、又我 佐藤先生、『道學標的』ノ書ヲ著シ、

學問ノ目アテコ、ナリトテ、長言ナシニ孔曾思孟周程張朱ノ八人ヲ出シ、コレヲ我輩ノ目當ニソサレケレバ、吾人コノ一書ニワイテハ、ヌク事モナラス、サス事モナラス、タス事モナケレバ、ヘラス事モナラズ、全然當レ拜ニ讀之。

因告ニ諸公ニ曰我日東始生ニ我山崎先生ヲ尋有ニ佐藤淺見三宅ニ先生之出ニ道學明ニ于世ニ亦不レ少矣我大人迂齋先生受ニ業於佐藤先生之門ニ講レ學有ニ年是以僕自レ幼學ニ于膝下ニ成童入ニ石原先生之門ニ受ニ父師之教ニ以ニ講レ書說ニ經爲ニ己業ニ僕至愚卑陋豈得レ受ニ其高喻ニ乎然今稍ニ知ニ理道之可ニ尚而以ニ此道ヲ爲ニ念誠教之使レ然也何幸耶僕蒙ニ不鄙ニ爲ニ鵜澤生ノ所延啓レ行到ニ于茲ニ諸公誤爲レ僕設ニ講席ヲ一日ニ使ニ某講解一孜ニ不レ怠其勵レ學之厚轉足ニ彊ニ人意ニ矣某先月十九日離ニ膝下ニ出家及ニ時與ニ大人一期至レ茲則講ニ道學標的一以示ニ道要ニ於レ是先レ期一日「十八日也」請ニ大人書ニ孔曾思孟周程張朱之文字ニ大人嘉ニ納之ニ輒書ニ其語各一凡八道ニ以從ニ某請ニ乃捧出某初意將以爲上総諸生爲レ學權興ニ酒井先生ニ盛ニ和田老大兄ニ自レ是諸生漸次立レ志深信ニ吾大人ニ不レ廢業不レ拒教ヲ乃至今日ニ也而隨ニ從大人ニ其直指面命者茲八人矣「姫寫鈴木氏折戸鈴木氏 片貝布留川氏 成東安井氏 早船平山氏 小松安井氏 清名鵜澤氏 東金大木氏」到レ此則趣ニ姫寫學舍ニ講ニ標の書ニ及ニ講畢ニ以ニ大人墨跡八道各一贈ニ八子ニ不レ圖姫嶋老兄家禍如レ此於レ是不レ得ニ八子同集ニ會ニ姫寫ニ而日ニ與ニ一二之友人ニ憂ル初心ニ而己十一月朔行ニ東金ニ二日反リ清名村ニ與ニ友人一期下明三日啓レ行歸中江府上及レ企ニ行装ニ徒然將下持ニ墨跡一空歸上レ郷雖レ然吾何嫌哉因與ニ鵜沢氏ニ謀レ實ニ前約ニ輒作ニ講義一小冊ニ充ニ面會ニ以欲下歸後煩ニ小童生一各ニ與ニ其家上便妄綴ニ數言ニ以易ニ石尤風ニ云レ爾。

宝曆壬申十一月二日「稻葉亦三郎撰ニ箋於清名村旅館ニ」



孔曾思孟周程張朱語

講義畧

朝聞道夕死可矣

注ニ不<sup>スバアル</sup>レ可<sup>スバアル</sup>以<sup>スバアル</sup>不<sup>スバアル</sup>一ト云字アリ。眼ヲ付テミヨ。

金ヲモタズンハアルベカラス、長生<sup>ナガイキ</sup>ヲセスンバアルベカラス、ズンバアルベカラズバ色トアリ。タハコヽノスンハアルヘカラズカナイ。コヽカ大事ノ処ナリ。逐一姫嶋君ニテ埒ヲ御明ケ候ヘかし。

一タ死<sup>ニハ</sup>イヤナ事ナリ。八十<sup>ニシテ</sup>而福来<sup>ルチス</sup>便死<sup>ト</sup>矣、コレハイヤナ事ナリ。朝聞道夕死可矣。ナゼニ可矣ナルゾ。体認シテミルベシ。

在明明德在親民在止於至善

佛者ハ役ニ立ズ。霸者ハ役ニ立ス。文仲子ハ役ニ立ス。學問ハ、大學ヲマナブ事大ナコトナリ。大コトハタゞハナラズ。可<sup>レ</sup>思。サテ親<sup>レ</sup>ノ字ヲ、程子、當<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>新ト。一寸シタ事ナレドモ眞儒ナリ。王陽明カ親ノ字テヨイト云ハ大ダワケナリ。トコカ眞儒ゾヤ。ドコガタワケゾヤ。自家引受テ知ルベシ。

尊德性而道問學

德性ヲ尊ヌカラ卑<sup>ヒク</sup>シ。問學ニ道ヌカラ小シ。學ハ高ク大ナルヲヨシトス。高大之字、所<sup>ム</sup>包<sup>シ</sup>廣<sup>シ</sup>。可<sup>レ</sup>味。卑小之字、千万ノ氣ノ毒コヽノ中ニアリ。所<sup>ム</sup>包<sup>シ</sup>廣<sup>シ</sup>可<sup>レ</sup>戒。

孟子道性善言必稱堯舜

學問ハ性善ナレバコソナル。猿ハカシコクテモナラス。學問ノ綱領、性善ノ二字ナリ。タゞ性善バカリ云タトデモ、イヤトハ云ハレネトモ、俗人共ガゼウガコワイカラ、稱<sup>ス</sup>堯舜<sup>ツ</sup>。然レハ、堯舜ハ證文ナリ。證文サヘアレハ、公事ニマケヌ。サテ、證文ニハ大勢ヲ出スヘキニ、タヽ二人テハ少キニ非スヤ。直方曰、「一匹ノ猫鼠ヲトレバ、アトノ千匹ハミナトル」。此中有<sup>ウチリ</sup>「深意」。姫嶋丈宜<sup>ヨロシク</sup>奉賴候。荀・楊ガ大ダワケハ

コ、ヲシラヌユヘノ事。ソレニ注ヲスル司馬温公、サテく痛敷事ナリ。コ、ニナルト温公ニサヘ顔ヲ赤クサセルゾ。

我友自重ゼヨ。人柄ワルケレハ一休小僧ナリ。

聖希天賢希聖士希賢「毎<sup>トニ</sup>讀不<sup>レ</sup>覺揚<sup>ケテ</sup>言曰吁々快哉快哉」

天ガ腰ヲヤスメヌカラ、聖人モヤスマヌ。聖人カヤスマヌカラ、賢人モヤスマヌ。賢人ガヤスマヌカラ、士ハナヲヤスマヌ。士トハ學者ナリ、儒者ナリ。メンくノ事ナリ。俗人ハ士テナシ。ソコデヤスム。

言學便以道為志言人便以聖為志

志ニ遠慮ハ入ヌ事。メンくカフキイテモ尻ゴミヲスルハ、カイナイユヘナリ。ソレカスグニ志ノナイノナリ。志ノタンテキヲ云ニ、奉公スルトキ君ヲソマツニスマイトロモイ、女ノ昏礼スルトキ夫ヲ二人モツマイトロモフガ志ナリ。女ガ夫ヲ二人モトフト云心ナラハ、ダレモ女房ニハスマイカ、學者カ聖人ニナラレマイト云ヲバ、ナゼニユルスゾ。

為天地立心為生民立道為去聖繼絕學為万世開太平

直方云、「四ツ為ノ字アレトモ、身ノ為メの一モナイ」ト。正信竊謂張子ノ此言ホンナリ。迂詐デナシ。

學者タチキモヲツブサル、ナ。燕雀<sup>ソ</sup>何知<sup>ニ</sup>鴻鵠<sup>ツ</sup>之心<sup>一</sup>

致知以明之立志以守之造之以精深充之以光大

正信謂四者廢其一則非學

右段々ニ而全体肝要ノコル処ナシ。タゞコレヲ体認スル事難シ。功夫ノ仕方、非<sup>レ</sup>他。「必有<sup>レ</sup>事勿<sup>レ</sup>正」ノ五字最妙ナリ。フンデフマザレ、活と滌と、中庸ト云モコレナリ。自然ト云モコレナリ。知<sup>モ</sup>ル者ハ知ラン。其要在<sup>ニ</sup>學友集會<sup>一</sup>。

千々万々遺恨ナルハ姫嶋丈  
書不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言言不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>意

頓首九拜

二日夜

稻葉正信

呈

姫寫大兄

折戸丈

布留川氏

平山氏

安井氏

小松生

鶉澤氏

大木氏

案下

別幅

孔曾思孟周程張朱之語

八道<sub>ハ</sub>大人<sub>ノ</sub>眞蹟<sub>我カ</sub> 八子丈各々以下<sub>ルノ</sub>入<sub>二</sub>大人之門<sub>一</sub> 先後<sub>上</sub>立<sub>二</sub>次序<sub>一</sub> 乃<sub>チ</sub>宜<sub>ク</sub> 受<sub>二</sub>納<sub>一</sub><sub>シテ</sub> 之<sub>一</sub> 其學<sub>之</sub> 進否<sub>一</sub> 德之高下<sub>ハ</sub> 或有<sub>ラ</sub> 焉

吾不<sub>二</sub>敢言<sub>一</sub>也

▼漢文部分の訓読

因つて諸公に告げて曰く、我が日東、始めて我が山崎先生を生じ、尋いで佐藤、淺見、三宅の三先生の出づる有りて、道学の世に明らかなること亦少しからず。我が大人迂齋先生、業を佐藤先生の門に受け、学を講じて年有り。是を以て僕幼より膝下に学び、成童石原先生の門に入り、父師の教へを受け、書を講じ経を説くを以て己が業と為す。僕、至愚卑陋、豈其の高諭を受くるを得んや。然るに今、稍々理道の尚ぶべきを知り、此の道を以て念と為す。誠に教への然らしむるなり。何ぞ幸なるや。僕、不鄙を蒙り、鵜澤生の為に延かれ行を啓きて茲に到る。諸公、誤つて僕か為に講席を設け、日々に某をして講解せしむ。孜孜として怠らず。其の学を励むの厚き、転人意を彊ふするに足る。

某、先月十九日膝下を離れ家を出づ。時に及びて大人と期す、茲に至らば則ち『道学標的』を講じ以て道要を示さんと。是に於て期に先んずる一日「十八日なり」、大人に孔曾孟思周程張朱の文字を書するを請ふ。大人、之れを嘉納し、輒く其の語各々一つ凡そ八道を書し、以て某が請ひに従ふ。乃ち捧じ出づ。某、初意將に以為らく、上総諸生の学為るや、酒井先生に権輿して、和田老大兄に盛んに、是れより諸生、漸次志を立て、深く吾が大人を信じ、業を廢てず、教へを拒まず、乃ち今日に至るなり。而るに、大人に随従し、其の直指面命なる者茲に八人なり。「姫島の鈴木氏 折戸の鈴木氏 片貝の布留川氏 成東の安井氏 早船の平山氏 小松の安井氏 清名の鵜澤氏 東金の大木氏」此に到らば、則ち姫島の学舎に趣き、『標的』の書を講じ、講畢るに及んで、大人の墨跡八道各々一つを以て八子に贈らんと。

図らざりき、姫島老兄の家の禍、此くの如くならんとは。是に於て、八子同じく姫島に集会することを得ずして、日々一二の友人と初心に負くを憂ふるのみ。十一月朔、東金に行き、二日清名村に反り、友人と明三日行を啓きて江府に帰らんことを期す。行装を企つるに及んで、徒然として將に墨跡を持ち空しく郷に帰らんとす。然りと雖も、吾れ何ぞ嫌たらんや。因つて鵜澤氏と前約を実にせんことを謀り、輒く講義一小冊を作り、面会に充て、以て帰つて後小童生を煩はして各々其の家に与へんことを欲す。便ち妄に教言を綴り、以て石尤風に易ふと云爾。宝曆壬申十一月二日「稻葉亦三郎 箋を清名村旅館に操る。」

## ○語注

【曰「吾學由來有準的以至聖人」之學ナリ】曰く、「吾が學の由りて來たる準的有り、以て聖人に至るの學なり」【東金大木氏】八子のうち東金の清十郎こと桜木闇齋は、大木剛中と稱した。【何嫌哉】どうして満足なことがあるうか。【石尤風】旅人の行く手をはばむ向かい風。尤朗の妻となつた石氏の娘が、旅に出て行方不明となつた夫を思ふあまり病に倒れ、「自分は大風になつて人が遠く旅に出るのを天下の妻達のためにはばむ」と言つて死んだ故事による。【文仲子】王通。【毎讀不覺揚言曰吁々快哉快哉】読む毎に、覚えざる言を揚げて曰ふ、「吁々、快哉快哉」と。【燕雀何知鴻鵠之心】「燕雀いづくんど鴻鵠の志を知らんや。」【史記】陳涉世家【正信謂四者廢其一則非學】正信謂ふ、「四者の其の一を廢すれば、則ち學に非ざるなり」と。【活と澁と】「活潑潑地」と同意。心が引き締まつた状態にありながら、しかも作為なく自然で、どこおりになくいきいきと天理の妙用そのものとなつてゐる状態。『二程全書』卷四の程明道の言葉に「鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍る。其の上下に察らかなるを言ふなり」。此の一段は、子思の嚆矢に人の為にせし処にして、「必ず事とすること有れ、而も心に正めすること勿れ」の意と同じ。活潑潑地なり。会し得る時

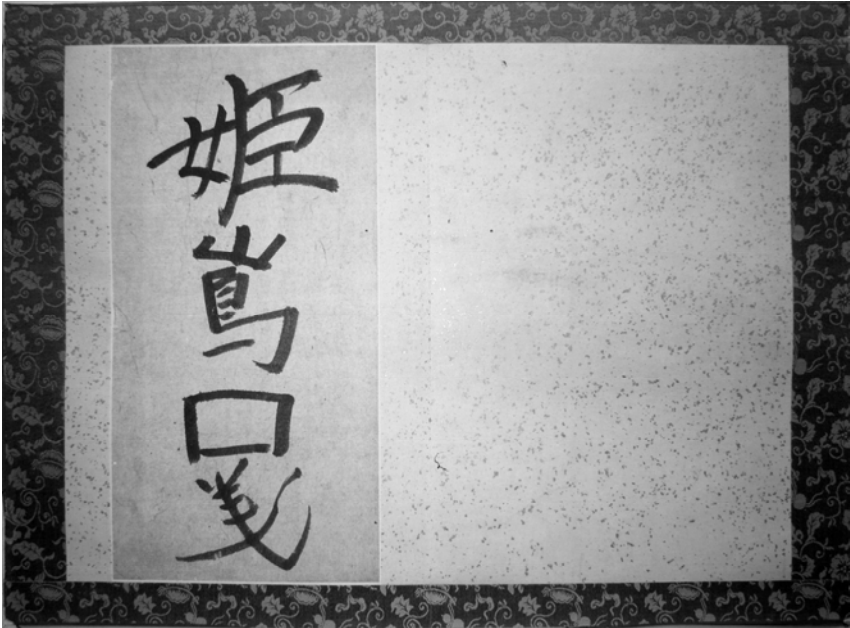
## 第二部 山崎闇斎学派についての資料

は、活潑潑地なり。会し得ざる時は、只是れ精神を弄するのみ。」とある。

六 稻葉默齋『姫島口義』



千葉県山武市成東 熱田氏所蔵 『稻葉默齋先生姫島講義真蹟書』



『姫嶋口義』表紙



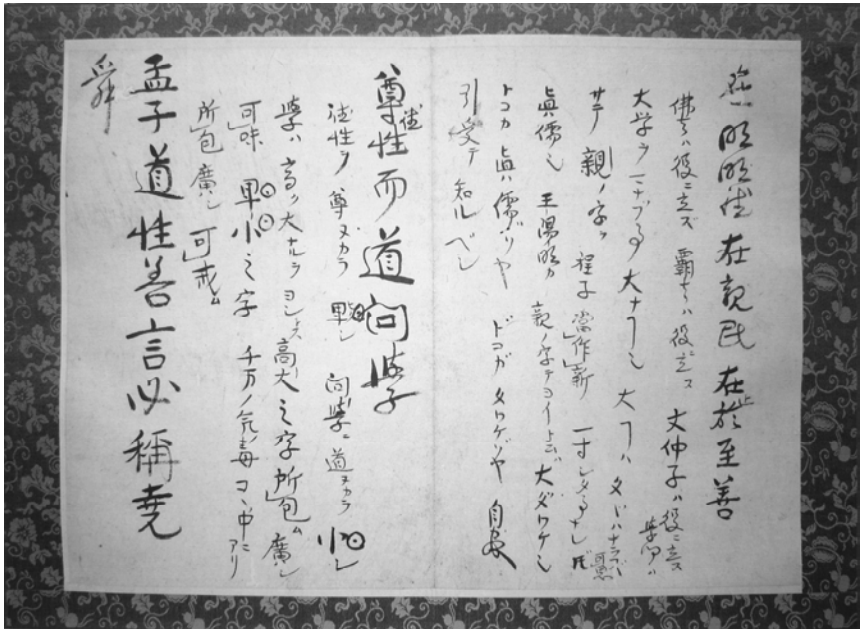
呈<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>総ノ指<sup>ニ</sup>引<sup>ニ</sup>  
 聖人ノ道。先儒ノ議論已<sup>ニ</sup>了<sup>ニ</sup>。實<sup>ニ</sup>確<sup>ニ</sup>  
 無<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>遺<sup>ニ</sup>蘊<sup>ニ</sup>則<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>新<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>モ<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>。タ<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>  
 書<sup>ニ</sup>小學<sup>ニ</sup>近<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>。三<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>。シ<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>。漢<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>  
 深<sup>ニ</sup>遠<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>た。他<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>来<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>。然<sup>ニ</sup>レ<sup>ニ</sup>モ<sup>ニ</sup>リ<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>。ト<sup>ニ</sup>モ<sup>ニ</sup>  
 シ<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>。シ<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>。讀<sup>ニ</sup>ム<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>。ウ<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ート<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>テ<sup>ニ</sup>。睡<sup>ニ</sup>リ<sup>ニ</sup>  
 ナ<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ウ<sup>ニ</sup>。愛<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>。明<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>景<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>。カ<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>テ<sup>ニ</sup>。何<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>ア<sup>ニ</sup>ロ<sup>ニ</sup>ヤ<sup>ニ</sup>  
 テ<sup>ニ</sup>モ<sup>ニ</sup>。此<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>。ナ<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>リ<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>景<sup>ニ</sup>色<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>知<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>。ヤ<sup>ニ</sup>。サ<sup>ニ</sup>レ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>。三<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>  
 ハ<sup>ニ</sup>ウ<sup>ニ</sup>キ<sup>ニ</sup>リ<sup>ニ</sup>ト<sup>ニ</sup>。目<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>。醒<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>テ<sup>ニ</sup>。ミ<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>肝<sup>ニ</sup>要<sup>ニ</sup>。ソ<sup>ニ</sup>テ<sup>ニ</sup>。コ<sup>ニ</sup>ソ<sup>ニ</sup>昔<sup>ニ</sup>  
 年<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>。佐<sup>ニ</sup>藤<sup>ニ</sup>先<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>。講<sup>ニ</sup>學<sup>ニ</sup>。鞭<sup>ニ</sup>策<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>著<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>。玉<sup>ニ</sup>ヘ<sup>ニ</sup>。學<sup>ニ</sup>  
 者<sup>ニ</sup>。ハ<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>。グ<sup>ニ</sup>ツ<sup>ニ</sup>。ツ<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>。ニ<sup>ニ</sup>。ム<sup>ニ</sup>ナ<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>ア<sup>ニ</sup>テ<sup>ニ</sup>。子<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>。人<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>  
 丹<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>。ヒ<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>。見<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>。他<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>。四<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>。近<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>。小<sup>ニ</sup>學<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>  
 三<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>。イ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>ホ<sup>ニ</sup>ド<sup>ニ</sup>。難<sup>ニ</sup>ク<sup>ニ</sup>。結<sup>ニ</sup>搦<sup>ニ</sup>。書<sup>ニ</sup>ト<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>。鞭<sup>ニ</sup>策<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>  
 ハ<sup>ニ</sup>。難<sup>ニ</sup>。酢<sup>ニ</sup>。ナ<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>レ<sup>ニ</sup>。ヤ<sup>ニ</sup>。三<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>。ト<sup>ニ</sup>モ<sup>ニ</sup>。無<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>。有<sup>ニ</sup>  
 ト<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>。四<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>。モ<sup>ニ</sup>。近<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>。無<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>。有<sup>ニ</sup>。タ<sup>ニ</sup>。ハ<sup>ニ</sup>。心<sup>ニ</sup>  
 ヲ<sup>ニ</sup>。ヒ<sup>ニ</sup>キ<sup>ニ</sup>ム<sup>ニ</sup>テ<sup>ニ</sup>。服<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>。サ<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>テ<sup>ニ</sup>。先<sup>ニ</sup>輩<sup>ニ</sup>。タ<sup>ニ</sup>チ<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>。異<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>  
 ヲ<sup>ニ</sup>。誠<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>。切<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>。塩<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>。付<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>。カ<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>。キ<sup>ニ</sup>リ<sup>ニ</sup>。千<sup>ニ</sup>。下<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>  
 實<sup>ニ</sup>。ニ<sup>ニ</sup>。ハ<sup>ニ</sup>。ト<sup>ニ</sup>。モ<sup>ニ</sup>。我<sup>ニ</sup>。々<sup>ニ</sup>。ハ<sup>ニ</sup>。ウ<sup>ニ</sup>。思<sup>ニ</sup>。タ<sup>ニ</sup>。ヤ<sup>ニ</sup>。ト<sup>ニ</sup>。自<sup>ニ</sup>家<sup>ニ</sup>

身上に引付痛く警束スヘシ。サチリミ一ツノ不  
 審アリ世ノ中ニモク儒者タナルニ何ゾミテ  
 ニテウ賦シ文ヲ作り、空山五月飲酒吸茶  
ト樂ミセテ渡リケラヒトコヨリ登ル人より多ク  
 大傍先生ト呼ビレハ何ウクルシキ 山崎一家ノ學ハ  
 勸ミ苦ミテホナララル、ガカリクルレニルノ學ハ  
 果ソ何ノ學ゾ曰哉此由來有事の以迄  
 重人ノ學ニ重人ユム人日本々(ア)人も見(エヌ)  
 神武以來近侍三人モク中國ナド四百年ノ久  
 キツイニカ跡出モナレハト中国ノ士モト主付テハ  
 ミモカタク口ニ迷デハ實ニガタシタビ重人ユム人  
 目<sup>ミ</sup>高<sup>コ</sup>ニテスル學向フ直ニ儒者也古學者也君子  
 儒然道學者も經學者も爲己之學也他カハル  
 宋儒ハ呼フ皆是我輩焉皆臆心防垂門ノ旨  
 訣ニッラノ道學者も月高ナレハ向<sup>ムカフ</sup>増先輩ノ  
 異見モ構考メ數策モ亦無用ノ異見無用ノ  
 數策トリルンソニテヨリ又我佐友先生  
 道學標のノ書ヲ著シ其ノ月アチマナリトテ  
 長言ニ孔曾思孟周程張朱ノ八人ヲ

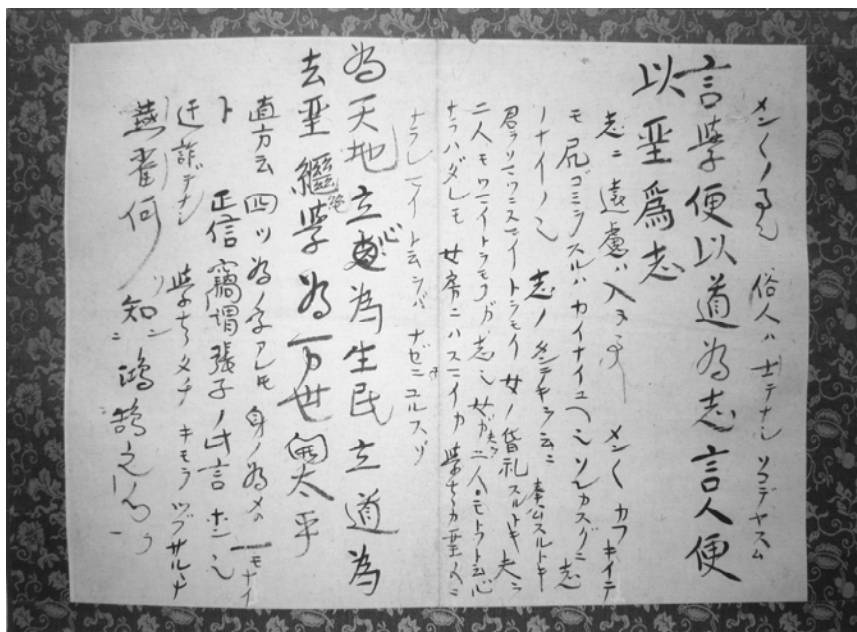
出<sub>レ</sub>己<sub>ラ</sub>我輩ノ目<sub>ヲ</sub>蒙<sub>ラ</sub>レ<sub>ル</sub>ハ 吾人<sub>コノ</sub>主<sub>マ</sub>  
 ニ<sub>ラ</sub>イ<sub>キ</sub>ハ 又<sub>ク</sub>ワ<sub>シ</sub>ミ<sub>サ</sub>ラ<sub>ス</sub> カ<sub>ス</sub>ミ<sub>サ</sub>ラ<sub>ス</sub> タ<sub>ス</sub>ミ<sub>サ</sub>ラ<sub>ス</sub>  
 ヘ<sub>ラ</sub>ス<sub>ミ</sub>サ<sub>ラ</sub>ス 全<sub>ク</sub>然<sub>ル</sub>當<sub>ル</sub>并<sub>ニ</sub>讀<sub>ム</sub>之<sub>ヲ</sub> 因<sub>テ</sub>告<sub>グ</sub>横<sub>コ</sub>公<sub>キ</sub>  
 曰<sub>ク</sub>我<sub>レ</sub>日<sub>ニ</sub>東<sub>ト</sub>始<sub>メ</sub>生<sub>シ</sub>我<sub>レ</sub>山<sub>ノ</sub>崎<sub>ノ</sub>先生<sub>ヲ</sub> 尋<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>依<sub>リ</sub>藤<sub>ノ</sub>淺<sub>ノ</sub>見<sub>ル</sub>  
 三<sub>ニ</sub>宅<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>先生<sub>ノ</sub>之<sub>ヲ</sub>出<sub>シ</sub>道<sub>ヲ</sub>學<sub>ブ</sub>明<sub>ル</sub>于<sub>ニ</sub>世<sub>ニ</sub>亦<sub>モ</sub>不<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>笑<sub>フ</sub>  
 我<sub>レ</sub>大<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>江<sub>ノ</sub>崎<sub>ノ</sub>先生<sub>ヲ</sub>受<sub>ケ</sub>業<sub>ヲ</sub>於<sub>ニ</sub>佐<sub>ノ</sub>後<sub>ノ</sub>芝<sub>ノ</sub>世<sub>ノ</sub>以<sub>テ</sub>講<sub>ス</sub>學<sub>ヲ</sub>有<sub>リ</sub>年<sub>ヲ</sub>是<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>自<sub>ラ</sub>創<sub>ス</sub>字<sub>ヲ</sub>于<sub>ニ</sub>膝<sub>ノ</sub>下<sub>ニ</sub>成<sub>リ</sub>立<sub>リ</sub>  
 入<sub>リ</sub>石<sub>ノ</sub>原<sub>ノ</sub>先生<sub>ノ</sub>之<sub>ヲ</sub>門<sub>ニ</sub>受<sub>ケ</sub>父<sub>ノ</sub>師<sub>ノ</sub>之<sub>ヲ</sub>教<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>講<sub>ス</sub>書<sub>ヲ</sub>  
 說<sub>ク</sub>經<sub>ヲ</sub>爲<sub>ニ</sub>己<sub>ノ</sub>業<sub>ト</sub>僕<sub>ハ</sub>至<sub>リ</sub>愚<sub>ニ</sub>里<sub>ノ</sub>通<sub>ル</sub>豈<sub>カ</sub>得<sub>テ</sub>受<sub>ケ</sub>其<sub>ノ</sub>高<sub>ク</sub>喻<sub>ヲ</sub>乎<sub>ナ</sub>今<sub>ニ</sub>稍<sub>シ</sub>知<sub>ル</sub>理<sub>ヲ</sub>道<sub>ヲ</sub>之<sub>ヲ</sub>可<sub>ク</sub>尚<sub>ル</sub>而<sub>モ</sub>以<sub>テ</sub>此<sub>ノ</sub>道<sub>ヲ</sub>  
 爲<sub>ニ</sub>念<sub>ヲ</sub>誠<sub>ニ</sub>教<sub>ヲ</sub>之<sub>ヲ</sub>使<sub>ス</sub>後<sub>ノ</sub>也<sub>ナ</sub>何<sub>ノ</sub>幸<sub>ナ</sub>耶<sub>ナ</sub>僕<sub>ハ</sub>蒙<sub>リ</sub>不<sub>レ</sub>鄙<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>羈<sub>ノ</sub>縛<sub>ト</sub>所<sub>ニ</sub>延<sub>ニ</sub>啟<sub>ス</sub>行<sub>ヲ</sub>到<sub>リ</sub>于<sub>ニ</sub>茲<sub>ニ</sub>  
 諸<sub>ノ</sub>公<sub>ノ</sub>誤<sub>ヲ</sub>爲<sub>ニ</sub>僕<sub>ト</sub>設<sub>ス</sub>講<sub>ス</sub>席<sub>ヲ</sub>日<sub>ニ</sub>使<sub>ス</sub>見<sub>ル</sub>講<sub>ス</sub>解<sub>ス</sub>政<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>怠<sub>ニ</sub>具<sub>ニ</sub>勵<sub>ス</sub>子<sub>ノ</sub>之<sub>ヲ</sub>厚<sub>ニ</sub>轉<sub>ス</sub>足<sub>ニ</sub>聽<sub>ル</sub>  
 人<sub>ノ</sub>意<sub>ヲ</sub>笑<sub>フ</sub>果<sub>シ</sub>十九<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>離<sub>リ</sub>膝<sub>ノ</sub>下<sub>ニ</sub>出<sub>リ</sub>家<sub>ヲ</sub>及<sub>リ</sub>時<sub>ニ</sub>與<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>人<sub>ノ</sub>期<sub>ス</sub>至<sub>リ</sub>茲<sub>ニ</sub>則<sub>チ</sub>講<sub>ス</sub>道<sub>ヲ</sub>學<sub>ヲ</sub>標<sub>ス</sub>的<sub>ト</sub>

以示道要於是先期一百十八日  
大人書孔曾思孟周程張朱之文字  
大人嘉納之輒書與培各一凡八  
道以從東情乃捧出某初意  
將以為上總諸生為學之規與酒井  
先生盛和田老兄自是諸生漸次立  
志深信大人不廢業不拒教乃  
至今日而隨從大人直指面中者  
茲八人矣  
堀富繁氏 折釜孝氏 片岡而留川氏  
成中守氏 品鶴平山氏 小松安井氏  
清名義隆氏  
東金大氏  
到世則趣姬嵩學令其講授  
的書及講畢以大人墨跡八道各一  
贈八子不圖姬嶋老兄家禍如世  
於是不得八子同集會姬嵩而與  
一二之友人憂初心而已十一月朔行  
東金二日及清各村與友人明三

日故行歸江府及企行哉徒然將  
 持單跡空歸鄉雖我吾何憐哉  
 因與鶯沢氏謀實前約一軌作攝  
 一小冊克面會歸後煩小童  
 生各與其家便綴數言以代石  
 左九云爾  
 宝曆辛丑十一月二日 箱葉亦三亭標  
 清谷村旅館  
 孔曾思孟周程張朱語 構茂畧  
 新道夕死可矣  
 注 不可以不 ト云字アリ 暇付テミヨ  
 金ヲモメシハアルベラス 長生ラモスハアルベラス  
 スハアルベトガ 色ニアリ タニノスハアルベトガ  
 コハカズノカシ 逐一姫侍君ニテ 好ク活明ク  
 一 夕死ハイヤナシ 八十而福来便死ス 己ハイヤナシ  
 新道夕死可矣 可矣 可矣 作場ノミルヘン

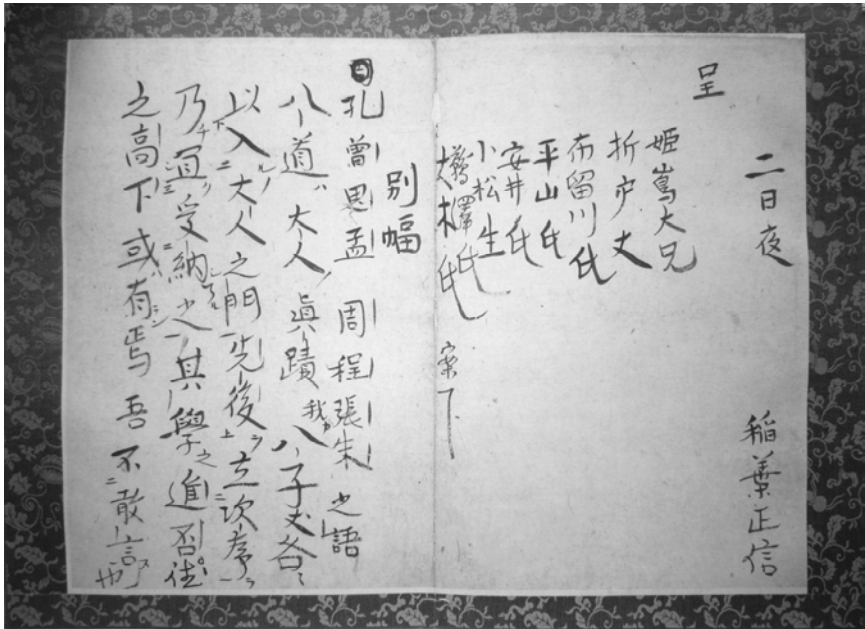


歩の性老ナレバコリナル猿ハアレコトナ  
 ラヌ歩ノ綱領性若ニナシタリ性若バ  
 カリシテモイヤト云ハレハ俗人ナガセウガ  
 コワイカラ稱羨希一終シ羨希ハ證丈ニ  
 證丈サレハ公のニケヌサテ證丈ハ大勢ラ  
 出ス(キミタ、二人テハサキニ非ヌヤ直戸曰  
 一匹ノ猫鼠ラトレハアトノ千匹ハミナトル  
 世中<sup>サナ</sup>の深<sup>リ</sup>さ<sup>ニ</sup>姫<sup>ハ</sup>泣<sup>キ</sup>思<sup>フ</sup>事<sup>ハ</sup>能<sup>ク</sup>  
 場<sup>ハ</sup>大<sup>ニ</sup>タリケハコ<sup>ノ</sup>う<sup>シ</sup>ヌ<sup>コ</sup>フ<sup>ノ</sup>荀  
 ソレニ注ラスル司馬溫公サテく痛<sup>ク</sup>憂<sup>ム</sup>  
 コニナル温公ニサ(顔<sup>フ</sup>赤<sup>ク</sup>サセルソ  
 我友自軍<sup>ズ</sup>人柄<sup>ハ</sup>ケルケルハ一休小僧<sup>ノ</sup>  
 聖希天賢希聖士希  
 賢<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>讀<sup>ム</sup>不<sup>レ</sup>受<sup>ル</sup>揚<sup>グ</sup>言<sup>ハ</sup>曰<sup>ク</sup>  
 天<sup>ハ</sup>が腰<sup>ヲ</sup>サヌメヌラ<sup>ハ</sup>吾<sup>ハ</sup>人<sup>ニ</sup>ミヤヌ<sup>メ</sup>吾<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>カヤヌ  
 ニヌカラ<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>人<sup>モ</sup>ヤヌ<sup>メ</sup>又<sup>ハ</sup>人<sup>ガ</sup>ヤヌ<sup>メ</sup>ヌカラ  
 士<sup>ハ</sup>ナラヤヌ<sup>メ</sup>士<sup>ハ</sup>ト<sup>モ</sup>希<sup>メ</sup>ナ<sup>リ</sup>希<sup>メ</sup>ニ





致知以明之 立志以守之 造  
之以精深 克之以光大  
正信竭四者廢其一則非學  
方修之 今修肝要  
ノコルル 久ナシ ターコラ 体認  
スルヲ 難シ 功夫ノ仕方非  
他 必有事 勿正ノ字 最ぬ  
こ フニ天フニサレ 活ニ流ニ 中ナト  
云モコレシ 自然ノ云モコレシ 知者ハ知  
其要在 學友 軍令  
ナニ万ニ遺恨ナシ 姫唄文  
書不云ハ言言 不云ハ言  
此首九拜



『姫嶌口義』末尾